

## 〈資料〉

# 慶長の役における巨済島海戦に関する豊臣秀吉発給文書について

三 好 俊

文禄・慶長の役に関しては、池内宏『文禄慶長の役正編第一』『文禄慶長の役別編第一』<sup>①</sup>や参謀本部編『日本戦史朝鮮役』<sup>②</sup>など戦前よりの研究を嚆矢とし、その後も北島万次氏や中野等氏らによって多くの研究成果が蓄積されている。しかし、その北島氏によって「実証全体としてはほとんどが第一次侵略の時点できちまっております、（中略）いまだに埋もれた史実がかなりある」<sup>③</sup>との指摘が出される他、中野氏も「個々の大名が具体的にどのような作戦・軍事行動をとったのかを確定する作業は依然不可欠」<sup>④</sup>と述べており、依然文禄・慶長の役、特に後者における日本側諸将の詳細な動向解明が課題であると言える。

その慶長の役の中でも、慶長二年（一五九七）七月に起こった「巨済島海戦」〔漆川梁海戦〕「唐島の戦い」とも呼称される）は文禄・慶長の役における最大規模の海戦の一つとして数えられ、日本水軍が朝鮮水軍を破った唯一のものとして重要性を持つ。慶長の役開戦間もない、慶長二年七月一五日、朝鮮の忠清・全羅・慶尚三道水軍統制使である元均率いる水軍が、日本軍の前線基地である巨済島と漆川島の間にある漆川梁に停泊していた。この情報を得た日本軍は水陸から挟撃する作戦をたて、一六日の明け方より藤堂高虎らの水軍は海上から攻撃し、陸上部隊がこれを援護した。戦いは日本水軍が朝鮮水軍を圧

倒し、朝鮮側の主将のうち元均、李億祺、崔湖は戦死し、一人裴楔のみが逃走した。そして、この海戦の結果、日本軍は制海権を掌握するに至った。

しかし、この海戦に関しても先述の北島・中野両氏の指摘のように、細かな動向まで把握されているとはいえない。このことに関しては、李敏雄氏よりも「既存の研究成果はほとんどなく、これまで等閑視されてきた」「基本的な経過など事実の当否も把握されていない状況」<sup>⑤</sup>との問題提起がなされ、同氏によって主に朝鮮側の史料を用いた戦いの経緯や、結果と原因についての整理がなされた。<sup>⑥</sup>この李氏の研究以後は津野倫明氏により、当海戦に関する注進状の分析がなされ、軍目付の注進の様子や豊臣秀吉による論功行賞について明らかにされた<sup>⑦</sup>ものの、研究は緒に就いたばかりであり、今後も関係史料の収集・分析が必要となるだろう。

さて、関西大学図書館には、この巨済島海戦に関する豊臣秀吉発給文書が所蔵されている。それが以下にあげる（慶長二年）八月九日付豊臣秀吉書状である。

[illegible][illegible]

〔図版〕「(慶長2年)8月9日付豊臣秀吉書状」写真

七月十六日之注進状今日九日到來、加披見候、

一、今度番舟唐嶋ニ在<sup>(レ)</sup>之、釜山海表へ切々罷出、日本之通路さしゆく<sup>(忠)</sup>の處、各以談合上は、十五日夜羽柴薩摩侍從・嶋津又八郎・小西撰津守・藤堂佐渡守・加藤左馬助・脇坂中務輔相動、從番船百六拾余艘切捕、唐人数千人伐捨、其外海へ追はめ、并先々津々浦々十五六里間之舟共悉焼捨候由、手柄無<sup>(比)</sup>類儀二候、向後迄之番船之根切仕候事、御感な<sup>(水)</sup>のめならず候、依<sup>(レ)</sup>之右六人かたへ被<sup>(レ)</sup>成<sup>(レ)</sup>御朱印<sup>(水)</sup>候旨、可<sup>(レ)</sup>相違<sup>(水)</sup>候、猶歸朝之刻可<sup>(レ)</sup>被<sup>(レ)</sup>加<sup>(レ)</sup>御褒美旨可<sup>(レ)</sup>申聞<sup>(水)</sup>候事、

一、各以相談上、釜山海ニ残置候衆之事、尤分別二候、以來もぬけかけ之動不<sup>(レ)</sup>可<sup>(レ)</sup>然候間、舟合丈夫ニ可<sup>(レ)</sup>相動候、右之衆へも被<sup>(レ)</sup>成<sup>(レ)</sup>御朱印<sup>(水)</sup>候事、

一、赤國先々相動付は、為<sup>(レ)</sup>通路倭城申付人数残置候<sup>(有)</sup>、動之人數可<sup>(レ)</sup>為<sup>(レ)</sup>無人<sup>(水)</sup>候之間、無用候、切々注進無<sup>(レ)</sup>之候ても、不<sup>(レ)</sup>苦候条、日々動付置、一度ニ可<sup>(レ)</sup>令<sup>(レ)</sup>注<sup>(水)</sup>進<sup>(水)</sup>之候、猶増田右衛尉・石田治部少輔・長束大藏太輔可<sup>(レ)</sup>申候也<sup>(長盛)</sup>

八月九日 秀吉(花押)<sup>(慶長二年)</sup>

熊谷内蔵丞とのへ<sup>(直盛)</sup>

早川主馬頭とのへ<sup>(長政)</sup>

竹内源介とのへ<sup>(竹中隆重)</sup>

垣見和泉守とのへ<sup>(直)</sup>

毛利民部大輔とのへ<sup>(高政・友重)</sup>

太田飛騨守とのへ<sup>(吉)</sup>

宛先の、熊谷直盛以下七名は、慶長の役に際して、秀吉が戦闘の経緯を報告させるために任命した軍目付<sup>(10)</sup>である。秀吉は、「諸事かうらいニての様体、七人より御注進申上儀、正意ニさせらるへき旨、被<sup>(レ)</sup>仰聞<sup>(水)</sup>候」と述べているように軍目付の注進こそを正しいものとするとしており、また起請文も提出させたいので、「諸事有様之体可<sup>(レ)</sup>申上<sup>(水)</sup>旨」を命じていた<sup>(11)</sup>。当初は、釜山倭城在番の小早川秀秋の軍目付として太田一吉、「先手」の軍目付として毛利重政・竹中隆重・垣見一直・毛利友重・早川長政・熊谷直盛が任命されたが、後に毛利重政が慶長二年五月に朝鮮で病死したため、釜山倭城の秀秋の軍目付として福原長堯が任命され、一吉が「先手」の軍目付に変更された<sup>(13)</sup>。軍目付が渡海諸将につけられる体制は「慶長の役における大きな特徴<sup>(14)</sup>」とされており、戦果を証明する鼻請取状発給が役割として確認される<sup>(15)</sup>。

本史料に、年号は記されていないが、彼ら軍目付の活動が見られることから、慶長年間のものであること、さらに内容より慶長の役開戦時に立てられた当面の目標である朝鮮の全羅道(赤国)<sup>(16)</sup> 侵攻が言及されていることから、開戦直後の慶長二年に比定できる。

文中には、「可<sup>(レ)</sup>相違<sup>(水)</sup>候」や竹中源介隆重を「竹内源介」と表記する(傍線部)など、不自然な表現や誤りが見られるが、これは後述するように類似の文言を持つ史料がこれまで多数確認されており、複数の文書を書き写す中で誤写されたものと考えられる。

では、具体的な内容の検討に移りたい。本文は、三箇条構成のため、一箇条ずつ取り上げていく。

一条目では、実際の戦闘における諸将の働きと、それに対する恩賞について述べられている。「番舟」とは敵の水軍を指し、これが巨済島（唐嶋）を拠点として釜山近海にしばしば出没するため、日本側の拠点である釜山倭城への通船が不安定な状況であった。これに対し、日本軍は談合の上で、島津義弘・島津忠恒・小西行長・藤堂高虎・加藤嘉明・脇坂安治が出撃し、番船一六〇余隻を切捕り、唐人数千人を討ち取り、その他大勢を海へ追い落とし、一五、六里にわたって敵船を焼却した。その働きにより、彼ら五人には朱印状と、帰国の際には褒美が渡される。以上が、一条目の内容であるが、記載されている諸将へ対する朱印状は複数現存しており、島津義弘・島津忠恒・藤堂高虎・加藤嘉明宛のものがこれまで確認されている。これら四通はいずれもほぼ同じ文面であるため、一例として、島津義弘宛のものを挙げる。

七月十六日注進状、今日九日到来、加<sup>二</sup>被見<sup>一</sup>候、今度番船唐嶋二有<sup>レ</sup>之而、釜山海表へ切々取出、日本通路相支候處、去十五日夜相動、番船百六十余艘伐捕、唐人数千人伐捨、其外海へ追はめ、并先々津々浦々一五六里之間之船共悉焼捨由、手柄之段無<sup>二</sup>比類<sup>一</sup>候、以来迄番舟根切仕候事、御感不<sup>レ</sup>斜候、何も帰朝之刻、可<sup>レ</sup>被<sup>レ</sup>加御褒美<sup>二</sup>候、猶德善院、増田右衛門尉、石田治部少輔、長束大藏太輔可<sup>レ</sup>申候也、

（慶長二年）  
八月九日 ○（秀吉朱印）

（島津義弘）  
羽柴薩摩侍従とのへ

具体的な戦功の表記が酷似していることから、諸将への朱印状と本稿で取り上げている目付宛での書状は、同じ報告を基にして書かれたも

のと想定できる。その基になる報告を示す史料とされるのが次の注進状である。

急度奉<sup>レ</sup>致言上<sup>二</sup>候、

一、番船唐島を居所二仕、日々罷出、日本之通船渡海一切不<sup>二</sup>罷成<sup>一</sup>二付て、五人之もの共申合、唐島え押寄、明昨日十五日夜半より明未之刻迄相戦、番船百六十余艘切取、其外津々浦々十五六里之間、ふね共不<sup>レ</sup>残焼棄申、唐人数千人海へ追はめ、切捨申候、猶此表之様子、從<sup>二</sup>御奉行衆<sup>一</sup>可<sup>レ</sup>被<sup>レ</sup>遂言上<sup>二</sup>之条、不<sup>レ</sup>及<sup>二</sup>申上<sup>一</sup>候、右宣<sup>二</sup>御披露<sup>一</sup>仰候、恐々謹言、

（慶長二年）  
七月十六日

小西<sup>（行長）</sup>撰津守  
藤堂<sup>（高虎）</sup>佐渡守  
脇坂<sup>（安治）</sup>中務少輔  
島津<sup>（忠恒）</sup>又八郎  
羽柴<sup>（島津義弘）</sup>兵庫頭  
德善院<sup>（前田玄以）</sup>

増田<sup>（長盛）</sup>右衛門尉殿  
石田<sup>（三成）</sup>治部少輔殿  
長束<sup>（正家）</sup>大藏少輔殿

津野氏によると、右の史料中の「御奉行衆」は軍目付を指しており、活躍の諸将からの注進とは別に、軍目付からの注進もなされていたことがわかる。そして、その二種の注進の文言をそのままなぞるような形で、大坂の秀吉から、各武将には褒賞を示す朱印状が、軍目付に対しては彼らの目付としての活動に対する返答としての書状が、それぞれに発給されていたと考えられる。

さて、一条目は以上のような巨済島海戦の実際の戦闘の様子とそれに対する褒賞に関する内容であったが、二条目においてはそれ以外の諸将の様子が見てとれる。

それによると、諸将で相談の上、釜山海に残しておいた者がいることがわかる。そして、彼らの動きを秀吉は「尤分別二候」と褒め、今後の抜け駆けを禁止し、残った衆に対しても、戦功を賞する朱印状が発給されていることが合わせて伝えられている。この釜山海に残った衆に対する朱印状の発給は、先述の実際の戦闘に参加した諸将へ対する朱印状のような戦功を伝える史料は確認されておらず、本史料によつて初めて確認された点である。本史料の大きな特徴と言えよう。

では、釜山海に残り、その功によつて秀吉から朱印状が発給された者は誰なのか。慶長の役において太田一吉に近侍する医僧として朝鮮に渡った、浄土真宗安養寺の僧慶念による日記『朝鮮日々記』慶長二年七月一〇日条によると、「番船から嶋のくち其外の嶋にかゝりて有りしに、加藤との又八日向・さつま・あわとの・土佐との・飛驒守殿をはしめて、番船をきり取やきやふり、残りなくうちはたしけれハ、それよりして番船つるに出すなり」とある。朝鮮日々記研究会編『朝鮮日々記を読む』<sup>(23)</sup>では、この一〇日条の記事を一五日の巨済島海戦を指すと推測しており、それに則り津野氏は巨済島海戦への長宗我部元親や蜂須賀家政の参加を指摘している。<sup>(24)</sup>特に、同じく『朝鮮日々記』によると巨済島海戦より以前に長宗我部元親は、豊後国佐賀関で太田一吉と合流し（六月二四日条）、名護屋・対馬を経て釜山に入っている（七月七日条）ことも確認できる。<sup>(25)</sup>軍功を示す朱印状などは確認されておらず、断定は出来ないものの、本稿で問題としている巨済島海

戦時において釜山海に残った将として長宗我部元親が推定できるだろう。

また、他に中野等氏によつて指摘されている立花宗茂の動向にも着目してみたい。立花宗茂は、慶長の役開始時の慶長二年二月二日付豊臣秀吉高麗再度出勢法度によると、「あんこうらい（安骨浦）の城」に配置となつていたが、その後の三月二十八日には配置換えが命じられている。

今度有「渡海」已後、釜山浦被「残置」候条、久留米侍従・筑紫上野・高橋主膳正為「一手」、諸事被「相談」、如「被」仰出、近辺之仕置等各被「申付」、可「有」在番事、不「可」在「御油断」候、先日直にも被「成」御誕候、猶安国寺可「有」演説候、恐々謹言

（慶長二年）  
三月廿八日

石治  
（石田治部少輔）

三成（花押）  
増右  
（増田石衛門尉）

長盛（花押）

柳川侍従殿  
（立花宗茂）

御宿所<sup>(26)</sup>

これにより、立花宗茂は釜山浦での在番となった。そして、立花家中の手になるとみられる「覚書」<sup>(26)</sup>には、「一、慶長二年丁酉七月、高麗二番渡り、此年ノ七月廿五日唐嶋ト申所にて番船ト防戦有、殿様ハ七月十四日ニ御渡海、御供ニハ小野和□・□花三左衛門・小田部新介・十時撰津守、其外ハ家中衆何モ対馬ニ被「居」、渡海不「申候」、番舟にてノ手柄ハ、加藤左馬助殿・藤堂佐渡殿其外諸勢同前ト承及候」とあり、立花宗茂もしくは少なくともその家中の者の、巨済島海戦におけ

る釜山海での「防戦」が伝えられる。彼らも、本稿で問題としている釜山海に残った将であった可能性を指摘できる。

釜山海の防衛となると、慶長の役開始に際して釜山在城を命じられた小早川秀秋の動向も注視すべきである。太田一吉の部下の大河内秀元の『朝鮮記』<sup>30</sup>によると、秀秋は慶長二年七月初旬に、「釜山海二御入城アリ」とされ、巨済島海戦の段階で釜山に上陸していたと考えられる。鳥津義弘ら戦闘を行ったグループに名がないところから、秀秋も釜山海に残った将であったのだろう。

以上、先行研究の成果に依りながらも、本史料二条目によって明らかになった、巨済島海戦時において釜山海に残った戦功により朱印状を受け取った武将は、長宗我部元親、立花宗茂、小早川秀秋らである可能性を指摘した。一条目と異なり、具体的な武将の名前が記されていないのは、後述するように釜山城は日本軍の侵攻にとって重要性を持つ城であり、書ききれないほどの多くの武将が守備についていたことも考えられる。今回、釜山海防衛にあたった可能性を指摘した三将の他にも、同様の働きをした武将はいるかもしれない。今後の研究の進展により明らかになることを期待したい。

最後の三条目の検討に移りたい。これまでの二箇条は、いずれも巨済島海戦における諸将の活躍とそれに対する褒賞（朱印状の発給）に関する内容であったが、最後の一条は慶長の役における今後の方針を秀吉が指示するものである。

その内容としては、まず日本側の軍勢について述べられる。それによると、当面の目標であった赤国（全羅道）<sup>31</sup> 侵攻の通路として、倭城に人員を残せば実動できる人数が少なくなってしまうので不要であ

る、とある。夙に言われているように、明征服を目的とした文禄の役（第一次侵略）の場合とは異なり、慶長の役（第二次侵略）の目的は朝鮮南部の奪取にあった。倭城の守りを捨ててでも、赤国（全羅道）への侵攻を優先するようにとの指示に、秀吉の朝鮮奪取への希求と、それに対する焦りが感じられる。

しかし、実際のところは秀吉の思うように事は進んでいない。本史料の発給の一ヶ月後の九月一六日の日付を持つ朝鮮在陣諸将が、前田玄以・増田長盛らに対して送った連署状によると、「一、釜山海之儀、<sup>〔立花宗茂〕</sup>最前ハ羽柴左近可致<sup>〔立花宗茂〕</sup>在城<sup>〔立花宗茂〕</sup>之旨、雖<sup>〔立花宗茂〕</sup>被<sup>〔立花宗茂〕</sup>仰出<sup>〔立花宗茂〕</sup>候上、日本より之渡口二御座候へハ、御注進等をも被<sup>〔立花宗茂〕</sup>申上<sup>〔立花宗茂〕</sup>、又御下知をも先手へさしはからい、被<sup>〔立花宗茂〕</sup>申触<sup>〔立花宗茂〕</sup>候ため二、毛利<sup>〔吉成〕</sup>壱岐守在城被<sup>〔吉成〕</sup>仕可<sup>〔吉成〕</sup>然と申義二御座候事<sup>〔吉成〕</sup>」とある。先述の二条目で問題とした釜山の城が、巨済島海戦後も重要性が衰えておらず、立花宗茂に代わり、文禄の役より部隊長を務め、「取次」役も担えたとされる毛利吉成<sup>〔吉成〕</sup>が在番することが在陣諸将の間で取り決められている。秀吉の認識とは裏腹に、渡海諸将間では、釜山を中心に守りを固める体制が形成されており、簡単には戦線を拡大できない状況であったことが読み取れるだろう。慶長二年から翌年にかけて行われた蔚山城の戦いの際に顕著に表れる秀吉と渡海諸将との間の戦況認識のギャップ<sup>〔吉成〕</sup>が、すでにこの段階から存在していたことが見てとれる。

さて、三条目では他に、宛先である軍目付の活動に関する指示も見られる。先の文言に続いて、今後の注進はこまめになくとも良く、日々の動きを記録しておく一度に注進すれば良い、とある。巨済島海戦に関する報告を経ての、秀吉から軍目付への方針転換とも言える指

示である。ここから、海戦の勝利に対する秀吉の安堵を窺うことは容易であるが、これ以後の秀吉の動きにも着目したい。この書状が出された翌日にも、秀吉から軍目付の七名宛ての朱印状が出されている。それが次の史料である。

追而被<sub>二</sub>仰遣<sub>一</sub>候、大明人数、朝鮮都より五日路も、六日路も、此方へ罷出、於<sub>二</sub>陣取<sub>一</sub>者、懸留則対陣を執、急度可<sub>レ</sub>令<sub>二</sub>注進<sub>一</sub>候、此方御留守之儀者、秀頼<sub>(豊臣)</sub>へ江戸内府、加賀大納言、越後中納言両三人被<sub>レ</sub>付<sub>二</sub>置<sub>一</sub>之、其外之御人数御跡より追々可<sub>二</sub>相越<sub>一</sub>旨被<sub>二</sub>仰付<sub>一</sub>、御自身甘騎卅騎にて被<sub>レ</sub>懸付、被<sub>レ</sub>成<sub>二</sub>御渡海<sub>一</sub>、即時可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>討果<sub>一</sub>候条、其中者聊余之動不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>仕候、先年可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>成<sub>二</sub>御渡海<sub>一</sub>思召、既御馬迄釜山海へ雖<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>差<sub>二</sub>遣<sub>一</sub>之候、各依<sub>二</sub>相留<sub>一</sub>無<sub>二</sub>其儀<sub>一</sub>、于<sub>レ</sub>今御無念思召候、今度之儀者、注進次第、富士白山愛宕八幡も照覧候へ、可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>成<sub>二</sub>御渡海<sub>一</sub>候、然者各舟ハ有次第、為<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>迎、右注進之御返事不<sub>二</sub>相待<sub>一</sub>、至<sub>レ</sub>于<sub>二</sub>名護屋<sub>一</sub>可<sub>二</sub>差越<sub>一</sub>候、早速為<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>懸付<sub>一</sub>、大坂名護屋迄之間、浦々泊々ニ早船次船次馬早被<sub>二</sub>立置<sub>一</sub>候条、海陸共ニ不<sub>レ</sub>移<sub>二</sub>時日<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>為<sub>二</sub>御着座<sub>一</sub>之間、可<sub>レ</sub>得<sub>二</sub>其意<sub>一</sub>候也、

八月十日 ○(秀吉朱印)  
(慶長二年)

早川主馬首殿<sub>(長政)</sub>

太田飛騨守殿<sub>(吉)</sub>

熊谷内蔵丞殿<sub>(直盛)</sub>

垣見和泉守殿<sub>(直)</sub>

竹中源介殿<sub>(隆重)</sub>

毛利民部大輔殿<sub>(高政)</sub>

福原右馬助殿<sub>(長義)</sub><sup>(34)</sup>

なお、これとは同文の朱印状が、同日付で島津義弘・忠恒宛てにも出されている。<sup>(35)</sup> 中野氏は、その島津氏宛の朱印状から「秀吉は、朝鮮側が制海権を失ったことで、明・朝鮮軍にも焦りが生じたと判断し、敵(大明の人数)の南下がいよいよ現実のものに迫ったと感じたようである」と指摘している。<sup>(36)</sup> 周知のように、秀吉は二度の侵攻いづれにおいても渡海を果たすことが出来ず、慶長三年八月一日にこの世を去る。右の朱印状に見えるような秀吉の渡海が、どれほどまでに現実性を持っていたものかはわからない。しかし、先に見たような「秀吉の耳目としての活躍が期待され」る軍目付の体制が整理され、その上での彼らに対しての渡海の通達、という状況を考え合わせれば、巨済島海戦の勝利を経て、秀吉の渡海へ向けての準備が進められたと想定できるのではないだろうか。

以上、関西大学図書館所蔵の(慶長二年)八月九日付豊臣秀吉書状の検討を行った。本史料は、軍目付からの巨済島海戦の報告に対する返事であるが、海戦時の日本側諸將の動向、戦功と朱印状の発給状況、海戦の勝利を受けての秀吉からの指示、軍目付の体制の整理、という幅広い情報を我々に与えてくれるものである。

海戦時に釜山海の防衛にあたった諸将にも朱印状が発給されていたこと(二条目)は、本史料を通じて初めて明らかになった点であるが、本稿においては、長宗我部元親、立花宗茂、小早川秀秋らの戦功であった可能性を指摘した。今後さらに、慶長の役に関する記録類や関連史料などと突き合わせることで、実態に迫れるものと考ええる。

海戦勝利を受けて、倭城へ入る人員を減らして侵攻にまわすように秀吉が指示を出していたこと（三条目前半）、軍目付の報告の頻度を減らすよう指示していたこと（同後半）も、慶長の役における秀吉の志向を伝えており、興味深い。秀吉と渡海諸将の間の意識の差が、この段階から存在していたと言えるだろう。

本稿冒頭で触れたように、文禄・慶長の役、特に慶長の役に関しては、日本側諸将の動向説明がなお課題となっている。本稿においては史料の分析を主としたため、細かな動向に関する指摘は推測の域を出ないものとなったが、本史料はその課題解決に対する一助となるものと考えられる。

#### 註

- (1) 吉川弘文館、一九八七年。初版はそれぞれ一九一四年、一九三六年。
- (2) 村田書店、一九七八年。初版は一九二四年。
- (3) 『豊臣政権の対外認識と朝鮮侵略』（校倉書房、一九九〇年）、『豊臣秀吉の朝鮮侵略』（吉川弘文館、一九九五年）、『壬辰倭乱と秀吉・島津・李舜臣』（校倉書房、二〇〇二年）など。
- (4) 『豊臣政権の対外侵略と太閤検地』（校倉書房、一九九六年）。
- (5) 註(3) 北島氏著書（一九九〇年）、八五頁。
- (6) 中野等「文禄の役における立花宗茂の動向」（『日本歴史』五九七、一九九八年）、五九頁。
- (7) 李敏雄「丁酉再乱記における漆川梁海戦の背景と主要経路」（黒田慶一編『韓国の倭城と壬辰倭乱』岩田書店、二〇〇四年）。
- (8) 津野倫明「巨済島海戦に関する一注進状」（高知大学人文学部人間文化学科『人文科学研究』一九、二〇一三年）。
- (9) 本史料は軸装されており、関西大学図書館の蔵書検索では「豊臣秀吉書状幅」（請求記号、Z3C\*2108832）と表示される。法量は、書

状部分のみの大きさである。

- (10) 軍目付に関しては、「目付」「横目」「奉行」など様々な呼称が史料上見られるが、本稿では北島氏の研究（註(3) 参照）にならない軍目付と呼ぶこととする。
- (11) 慶長二年二月二日付豊臣秀吉高麗再度出勢法度（『大日本古文書島津家文書』四〇二号）。
- (12) 同右。
- (13) 慶長二年五月二四日付豊臣秀吉朱印状写（『福原長堯宛』（東京大学史料編纂所架蔵レクテグラフ「成實堂古文書」）。軍目付の働きに関しては、津野倫明「軍目付垣見一直と長宗我部元親」（『長宗我部氏の研究』吉川弘文館、二〇一二年、初出二〇一〇年）を参照。また、軍目付の実名に関しては、同「慶長の役における軍目付の実名について」（『ぐんしょ』再刊第五四号、二〇〇一年）による。
- (14) 中野等「秀吉の軍令と大陸侵攻」（吉川弘文館、二〇〇六年）、三〇三頁。
- (15) 津野倫明「黒田長政宛鼻請取状について」（高知大学人文学部人間文化学科『人文科学研究』一七、二〇一二年）。
- (16) 註(11) 参照。
- (17) （慶長二年）八月九日付豊臣秀吉朱印状（『大日本古文書島津家文書』四三六号）。
- (18) （慶長二年）八月九日付豊臣秀吉朱印状（『大日本古文書島津家文書』四三七号）。
- (19) （慶長二年）八月九日付豊臣秀吉朱印状（東京大学史料編纂所架蔵影写本「藤堂文書」）。
- (20) （慶長二年）八月九日付豊臣秀吉朱印状（東京大学史料編纂所架蔵影写本「近江水口加藤文書」）。
- (21) （慶長二年）七月一六日付島津義弘外五名連署言上状案（『大日本古文書島津家文書』九六七号）。
- (22) 註(8) 津野氏論文。
- (23) 法蔵館、二〇〇〇年。本稿では、『朝鮮日々記』の翻刻は、当著書に



従う。

- (24) 津野倫明「慶長の役（丁酉再乱）における長宗我部元親の動向」『長宗我部氏の研究』吉川弘文館、二〇一二年、初出二〇〇四年）、同「朝鮮出兵と西国大名」（佐藤信・藤田覚編『前近代の日本列島と朝鮮半島』山川出版社、二〇〇七年）。

- (25) 先述のように、『朝鮮日々記』において巨済島海戦に関する記事の日付のずれが想定できることから、元親の渡海に関しても実際と異なる可能性はある。

- (26) 註（6）中野氏論文。

- (27) 註（11）参照。

- (28) 増田右衛門尉長盛・石田治部少輔三成連署奉書（『福岡県史』近世史料編・柳川藩初期第四五四号文書）。

- (29) 某覚書写（『福岡県史』近世史料編・柳川藩初期第一二七八号文書）。

- (30) 『続群書類従』第二十輯下。

- (31) 註（11）参照。

- (32) （慶長二年）九月一六日付宇喜田秀家外十四名連署言上状案（『大日本古文書島津家文書』六八九号）。

- (33) 毛利吉成の朝鮮における動向や地位に関しては、津野倫明「文禄・慶長の役における毛利吉成の動向」（高知大学人文学部人間文化学科『人文科学研究』九、二〇〇二年）参照。また、釜山が注進の進上と朱印状の諸陣への伝達を行う位置にあったことは、佐島頭子「文禄・慶長役期の秀吉朱印状の送達について」（『福岡女学院大学紀要』一、一九九一年）によって指摘されている。

- (34) 蔚山城の戦いの状況とその政治的影響については、註（3）北島氏著書を参照。

- (35) （慶長二年）八月一〇日付豊臣秀吉朱印状（東京大学史料編纂所架蔵影写本「北村季彦氏所蔵文書」）。

- (36) （慶長二年）八月一〇日付豊臣秀吉朱印状（『大日本古文書島津家文書』四三二号）。

- (37) 註（13）中野氏著書、三一〇頁。

- (38) 註（8）津野氏論文、一頁。

〔付記〕本稿は、関西大学アジア文化研究センター（CSAC）第三二回研究例会における口頭報告を基に作成したものである。皆さまには貴重なご意見を頂いた。また、関西大学図書館には、図版の掲載を承諾していただいた。末尾ながら記して御礼を申し上げます。

（関西大学大学院文学研究科・博士課程後期課程）